ドS女盗賊がドM戦士を玉責め調教！

玉子王子　著

１章　これがクーゼラ得意の金責め交渉術

一階は酒場、二階は宿屋。
酒場には大勢の客がいる。
エルフなど亜人族も多い。
田舎の街なので、普通ならそうそう亜人など見かけない。
しかし、冒険者の宿と呼ばれる、流れ者の集う宿屋なら別だ。
そこの机の一つに、四人の男が座っている。
前に、一人の褐色の肌の若い女が立っていた。
「へ、女なんぞお呼びじゃねえよ」
戦士らしい男。
何処かへ行け、と手を振る。
「仕事が終わったら、付き合って欲しい上玉だけどな、一緒に戦うってわけにゃいかねえ」
「あら、私の方が強いのに？」
笑って言う。
肩をすくめ、踵を返そうとする。
男たちはどう反応するべきか顔を見合わせる。
喧嘩を売られたのか。
しかし、女一人に四人では。
大体、今の一言で激発するには、男たちは落ちつき過ぎている。
三十少しで、その女より下手をすれば十歳年上だ。
特に、誰も何も言わない。
いや、一人が立ち上がる。
「ちょっと待ちな姉ちゃん。俺らも腕で食ってるんだよ」
「そう？　じゃあ、ちょっと確かめてみましょうか」
「それじゃ、俺が勝ったらひと晩付き合えよ」
「いいわ。私が勝ったら、仲間に加えてもらうわよ」
「こりゃ割がいい」
笑って、武器を外す。
鎧は鎖帷子のシャツ。
冒険者の鎧は一人で脱ぎ着しなければならないので、板金鎧などは無理だ。
女はそれも着ていない。
平服に、短剣である。
盗賊とか、密偵と呼ばれる職業、いや、それらをこなすのに必要なある種の技能の持ち主というべ

きか。

　男対女のミックスファイトが始まるらしいというので、酒場は沸く。

　たちまち、賭けが始まる。

　血の気が多い冒険者の男女の中には、止めようというものはいない。

　見るとは無しに見ていた周りの者たちは、女盗賊のほうからこの形に持っていったのもわかっていた。

　なら、止める必要もないだろうと。

「それじゃ、来なさい」

　男が走り出す。

　悪くない動き。

　ただ、腕が立つという程のこともない。

　まあ並の戦士といったところだろう。

　拳。

　殴る。流石に顔を狙うことはない。

　それをかわし、パンと軽い音を立てる女盗賊。

「おぐう！」

　わっ、と周囲が沸く。

　笑い声。

「おいおい、いきなりキ〇タマかよ！」

「馬鹿か、女と喧嘩だぞ、絶対狙ってくるだろが！」

　どの程度痛いのかわかっている男たちが、平気で囃し立てる。

「いいよあんた！　やっちゃいな！　キ〇タマ潰してやりなよ！」

「そうよ、女舐めてんだからそいつら！　玉潰れたら私の魔法で治してあげるわよ！」

　肉玉ぐらい、あっという間に治せる魔法がポピュラーな世界。

　特に魔法使いなど特殊な職業のものが多い冒険者の宿などならなおさら潰れた玉の心配など要らない。

　が、蹴られた痛みがそれで半減するわけではない。

　女盗賊が頬を緩める。

　――うふふ、キ〇タマ蹴られた男の顔ってホントセクシーよねえ。全然タイプじゃないおっさんだけど、キ〇タマ蹴らせてくれるならヤらせてあげてもいいぐらいよ。

　そんな要求を出されたら、股間を片手で押さえて呻く戦士はどう思っただろうか。

　まだ、軽く蹴られただけなので膝を締めつつも戦意はなくなっていない。

「こ、このガキ……よくも……」

「クーゼラよ」

「がああっ！」

　泣きそうな顔だが、声だけは威勢がいい戦士。

　掴みかかる。

　掴みさえすれば、勝てるつもりだ。

抱きつくような戦士。

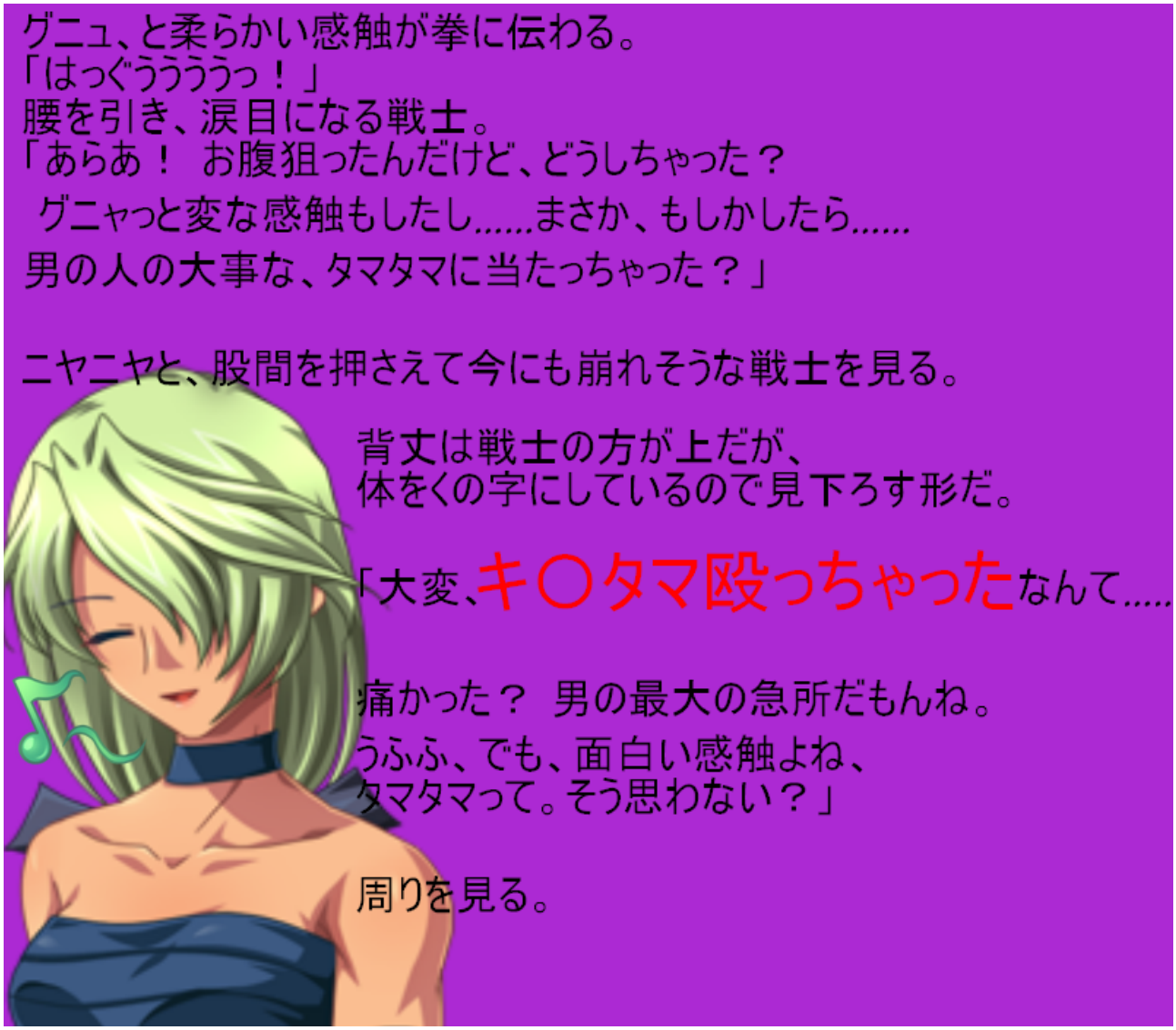
しがみつかれる。

一瞬前にすべるようによけるクーゼラ。

そうしつつ拳を握って、鉄槌という形で素早く振る。歩くときに手を振るような形だ。

ただ、戦士のある部分を狙っている。

グニュ、と柔らかい感触が拳に伝わる。



「はっぐうううううっ！」

腰を引き、涙目になる戦士。

「あらあ！　お腹狙ったんだけど、どうしちゃった？　グニャっと変な感触もしたし……まさか、もしかしたら……男の人の大事な、タマタマに当たっちゃった？」

ニヤニヤと、股間を押さえて今にも崩れそうな戦士を見る。

背丈は戦士の方が上だが、体をくの字にしているので見下ろす形だ。

「大変、キ〇タマ殴っちゃったなんて……痛かった？　男の最大の急所だもんね。うふふ、でも、面白い感触よね、タマタマって。そう思わない？」

周りを見る。

「そうよね！　ゴチャっとキ〇タマ蹴った爪先の感触はたまらないわ」

「キ〇タマやられる前と後の男の顔の違いも見モノよね！」

「チ〇ポついてりゃ偉いみたいな顔してる連中が転げ回るのは気分がいいわ」

女冒険者たちが次々と同意してくる。

いや、同意を超えている気もする。

半分以上悪ふざけだ。

だが、聞いている男たちは人間も亜人も問わず、同じような肉玉が縮み上がる。

「がああっ！」

戦士が叫び、再び突進。

クーゼラは、それをみて笑う。

かなり手加減している。

始めの爪先金蹴りでも、ほとんど撫でるようなつもりで蹴った。

――本気で蹴り込んでればあの一発で終わりだったけど……それだとタマタマ潰れかねないし。治るとはいえ、これから一緒に冒険する仲間にいきなり喧嘩売って去勢は無茶よね。それに、すぐやっちゃうと次が出てくるだろうから意味ないしね。

かなり手加減されているとはいえ二度も急所攻撃を食らい、戦士の動きは目に見えて鈍っていた。

それで素早いクーゼラを捕まえられるわけがない。

が、腕を捕まれる。

「へへ、こうなったら力だけの勝負だ！」

「あら、そうかしら？」

「なにを……おぐっ！　ちょ、ま……それはずるい……」

抱きしめるようにしがみつき、投げ飛ばそうか何をしようかと勝利を確信した顔だった戦士。

それが、凍り付いていた。

一方で、抱きつかれてフットワークも何も使えなくなったクーゼラが余裕の笑みを浮かべている。

「あら、どうしたの？」

周りの冒険者たちが、クーゼラのピンチのはずなのに彼女は平然として、王手をかけた戦士が震えている状態に首をかしげる。

と、女戦士らしい**ビキニアーマーの熟女**――と言っても三十いくかどうかだが――が手を叩く。

「あらやだあ！　戦士さんのズボンの前、見て！」

言われて、冒険者たちがその別に見たくもない場所を見る。

見ないでも、なんとなく先は読めていたが。

「ほら、ズボンの中に手を！　男の人の大事なタマタマちゃん握ってるわあれは！」

「わかりますか？」

横の童貞臭い若者がクーゼラだけではなく、熟女にも怯えたような目を向ける。

彼にも当然つくものがついているからには、女たちがそこへの攻撃にはしゃぐ姿をみて恐れないわけがない。

熟女はそんな若者の様子に気づきながらも、フォローしない。

というか、それが相手と付き合う上でプラスなので合えて見ない振りをするような感じで話す。

「もちろんよ！　アマゾネスは話すより先にキ〇タマの潰し方を教えられるのよ？　だから握ってる

かどうかは見ればわかるの」

　無茶苦茶な話だが、別に誰も反論はしない。

　腰を引く若者。

　熟女が頬を緩める。

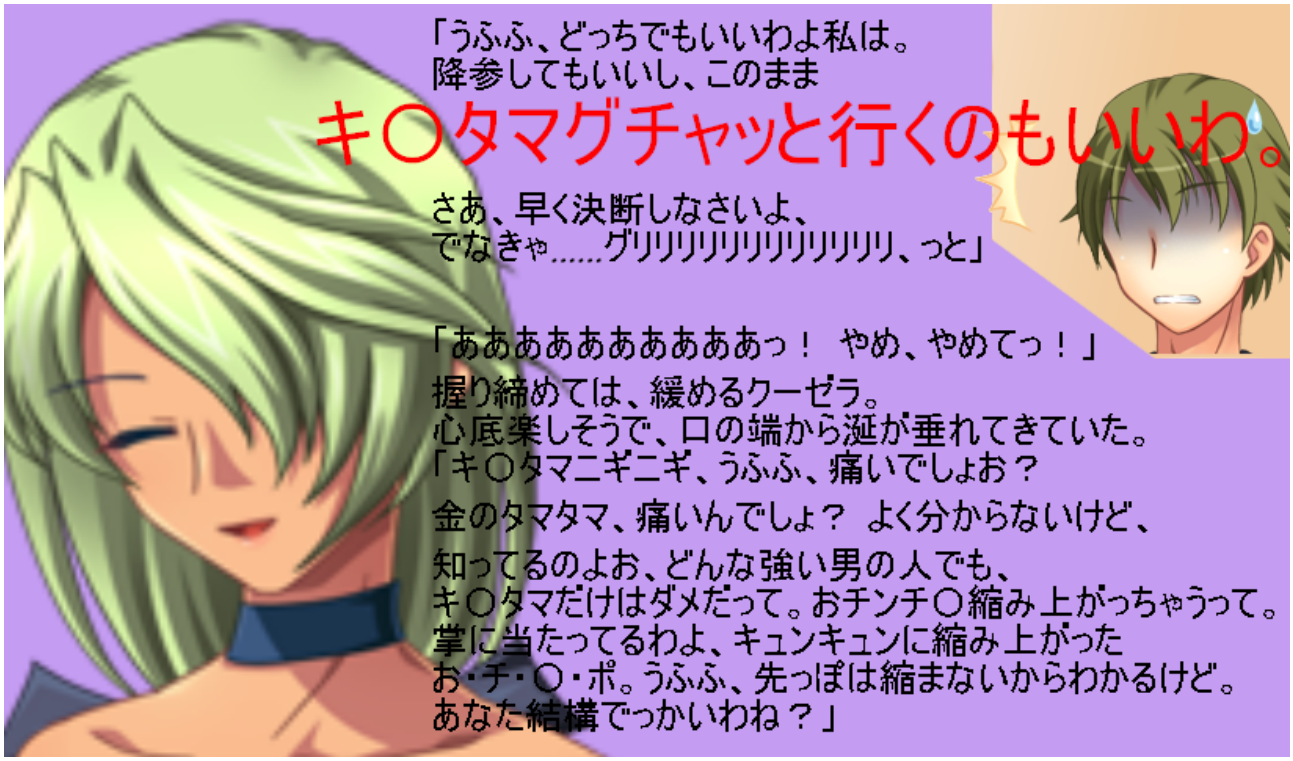
「あら、デカチ〇ポ、反応しそう？」

　小声で、耳元。

　若者がうなづくと、その手を取って目で二階を示す。

　二人ぐらい抜け出しても、特にこの場で何も変わることはない。

「うふふ、どっちでもいいわよ私は。降参してもいいし、このままキ〇タマグチャッと行くのもいいわ。さあ、早く決断しなさいよ、でなきゃ……グリリリリリリリリリリリリ、っと」



「あああああああああああっ！　やめ、やめてっ！」

　握り締めては、緩めるクーゼラ。

　心底楽しそうで、口の端から涎が垂れてきていた。

　それどころか、スカートの下の下着がじっとり濡れ始めている。

　その雌蜜でもわかるとおり、彼女は根っからのドＳで雄玉を責めるのが好きで仕方がないという相当まずい性癖・性格の持ち主だった。

「キ〇タマニギニギ、うふふ、痛いでしょお？　金のタマタマ、痛いんでしょ？　よく分からないけど、知ってるのよお、どんな強い男の人でも、キ〇タマだけはダメだって。おチンチ〇縮み上がっちゃうって。掌に当たってるわよ、キュンキュンに縮み上がったお・チ・〇・ポ。うふふ、先っぽは縮まないからわかるけど。あなた結構でっかいわね？」

　むしろ逆である。戦士は自分の事なのでよく分かっている。

「へえ、あいつでっかいんだ」

「まあ女にキ〇タマ蹴られて殴られて握られて、このままじゃ握り潰されるから身動きできずに降参

しようとしてる奴のチ〇ポがでかくても仕方ない話だけどね」

　決定的に仲違いする気はない、一緒に仕事に行きたいだけなのだ。

　さりげなく褒められたこともあり、戦士はもう降参していいかと思う。

　このまま握り潰される意味もない。

「こ……」

「降参するわ」

　突如、肉玉から手を離し、ズボンから手を引き抜くクーゼラ。

「相打ち覚悟で来られちゃ、体重の差でまずいもんね。……流石に本職には勝てないけど、それなりに強いことはわかってくれたでしょ？」

　なんとも、強引に立ててくる。

　思わず、戦士は笑ってしまう。

　元々クーゼラの挑発にさっさと乗った単純な男だ。

　肉玉の痛みも忘れ、クーゼラの無茶な交渉術に受けてしまう。

「わかったよ、クーゼラ、とかいったな？　一緒に行こう」

「うれしいわ！　さすが大きいだけのことはあるわね」

　盗賊として、情報を聞き出すのに女の武器を使うことは多い。

　下手をすれば年齢一桁時代からそんなことをやっていた気もするクーゼラは経験した男の数は四桁行ってるかも、と思うほどだ。

　それは見てきた一物が千本近いということでもある。

　そのランキングと照らすと、戦士のものは間違いなく下位一割だ。

　時々いる、性交に問題はなく、病気の類ではまったくない、まるで健康でしっかり発育しているのに、とにかくやたら短小という男。

　そういう男の一人と、肉玉を握るついでに触れたのでわかった。

　――超包茎チ〇ポだったもんね。皮の余り具合は本物だったわ。

　何が本物なのかまったくわからないが、とにかくクーゼラは確信していた。

　――ほかの三人もチ〇ポ小さいのかしら？

　どうでもいいことを考えつつ、自己紹介しあう。

「それじゃ、改めて確認するが……」

　まだ肉玉が痛いが、クーゼラが加減していたので一様我慢できる程度である。

　その戦士は、名前をガスリョといった。一行のリーダーである。

「俺たちが行くのは、ムトゥーゾの村。ここの近くに、最近オークの群が出没してるんだと。村人も自衛するが、それだけじゃ心もとないからプロの俺たちを呼んでるわけだ」

　ガスリョたちというより、冒険者の宿に報酬など条件を提示し、誰かに来てくれといっているわけだ。

　それを彼らが受け、そのことを知ったクーゼラが加えて貰いにきた。

「オークどもを何とかした、と村が判断するまで拘束される。結構かかるが、それはわかってるな？」

「もちろんよ」

　手ごろだ。

クーゼラは、この町でちょっと問題を起していた。

細かい事情はともかく、変装して有力者の息子の肉玉を蹴り上げていた。

結構悪質な相手だったので全力膝蹴りで、ゴリゴリ磨り潰すことまでした。

それで、見事片金粉砕である。

魔法ですぐ治るとはいえ、肉玉を潰される痛みと恐怖と屈辱は何一つ軽減されない。

息子に泣きつかれた父親は、犯人を捜索中だ。

変装しているのでわからないはずだが、念のためにしばらく町を離れたい。

金があるなら隣町にでも高飛びすればいいが、ないのだから食事つきである程度日当もでる、しかもしばらく町を離れられるというこの仕事は手ごろだった。

臨時の五人パーティーを結成したクーゼラたちは、次の日に早速ムトゥーゾ村に向かう事にする。

その深夜、目が覚めるクーゼラ。

部屋の中に息遣い。

誰もいないはずの部屋だ。

枕もとの短剣に手を伸ばす。

「俺だよ」

ベッドの横に立っているのは、ガスリョだった。

夜這い、としか考えられない。

「ガスリョ、まだそんな仲じゃないでしょ？」

「惚れちまったんだよ、抱かせろ」

夜目が利くクーゼラは気づく。

ガスリョはすでに全裸だと。

――気が早いわね！　っていうか……

ベッドに寝転んだ状態なので、顔より別の部分が近い。

全裸なので、注目せざるを得ない。

――やっぱりこいつ、チ〇ポ小さいわ！

立っているのだから流石に小指ぐらいとまでは言わないが、親指ぐらいではある。

ビンビンらしいが、皮がかなり余っている。

一様剥けているが、先端と茎の間に分厚く皺がよっているのだ。

多分手で剥いたんだろうな、とクーゼラは思った。

下で、皺だらけの肉袋の中に二個の鶉の卵ぐらいの球体が収まっているのも見える。

見えるというか、むしろ**クーゼラの関心はそちらにある**とさえいえるが。

とにかく、相手をする気はない。

別に短小だからではない。

四人の男の一人とだけさっさと寝るというのはあまりい感じではない。

しばらく親しくして、誰か選ぶならまだしもだ。

いきなりヤッたのでは軽い女として、他の男にも手を出されるだろう。

四人全員として楽しい女もいるだろうが、クーゼラは面倒なのは嫌いだった。

――あー、どうやって断ろう？　あんまりきついこと言うと今日手加減したのがなあ。でも、オークから村を守るミッションなんていつまで続くかわからないんだから、四人全員とハメハメ状態になるのはかったるいわ。

考えている間に、ガスリョが一歩近付く。

プルン、と目の前で男の体の中で一番柔らかそうな所が揺れる。

まじまじ見ると、気づくこともある。

「ああ、キ〇タマは普通なんだ」

ついロに出す。

別の部分は普通じゃないといっているも同然だ。

が、ガスリョは三十過ぎの大人らしく気にしない。

「いいだろ！？」

いや、興奮して聞いていないのかもしれない。

シーツが捲られる。

その下は全裸である。

それを見ると、もうたまらないとベッドに入ってこようとする。

勝手な振る舞いに頭に血が上るクーゼラ。

「ああ、めんどくせえ！」

「おぐっ！」

どんな態勢だろうが、大抵は金的攻撃ができる金責めマイスターのクーゼラ。

体を転がし、プルルンと形のいいオッパイを揺らしつつ掌を放つ。

ベッドのスレスレを掠りながら、払いあげるようにガスリョの雄玉を叩き潰す。

そして鶉の卵二個を柔らかい掌の中に納め、指で逃がさないように握りこんで握り潰す。

「おはぐっ！」

「しつこいのよ。っていうか、今無理矢理犯っちゃおうとしたわね？　ヤリたいならちゃんと段階をおってしなさい。さもないとこの腐れキ〇タマ……」

ギュウウウウウウウウウウウウウウウウ、クーゼラの握力は成人女性として普通の水準だ。

それでも、肉玉を握り潰すのに慣れている彼女は、相当短い時間で片手でも去勢できる。

今は、潰す気はないが潰れても仕方ないぐらいの気持ちで握り締めていた。

ガスリョは片膝をベッドについたまま、肉玉を握り潰されて身動きできない。

それを見上げて、余裕のクーゼラ。

「ほら、さっさと諦めて……」

と、その目が開かれる。

「あ……」

ビンビン。

小ぶりというか、健康で性交可能な範囲で最小クラスの大きさの一物。

今、その下の命の源を握り潰されて、普段以上に縮み上がっているはずだ。

そのはずだが、まったくそんな様子はない。

チラ、とガスリョを見上げる。

ガスリョの命を握り締めながら、ようやく寝転がっていた状態から上体を起す。
「やだ……ビンビンじゃない」
「は、はなして……諦めるから……」
「なーにいってんの！　ビンビンじゃない！」
「いや、それは……」
いくらか緩められて、ぜいぜい息をつくガスリョ。
握られているときは、ろくに息も出来なかった。
弛んのだから、殴って放させようかと一瞬思うガスリョ。
――いや、失敗したら絶対こいつキ〇タマ潰すぞ。今なら謝りゃ……
手が離れる。
「ちょっと、そこに立って」
「いや、もう今日は……はぐうあああ！」
言われて立ったガスリョ。
後ろにベッドがくるように立たされる。
その無防備な股間に、クーゼラの膝が減り込む。
「おんぐうううううう」
ベッドが邪魔で下がれず、モロに食らう。
いや、別に下がる場所があっても、彼の腕と金握りのダメージを受けた状態ではやはり同じだっただろうが。
ドＳ女性の本能か、ゴリゴリともう、当然のように膝頭で肉玉を追い、ミンチにしようとする。
「や、やめ……」
「ああ、すっごいわ……」
目を輝かせるクーゼラ。
足を引くと、ガスリョはその場に座り込む。というか、後ろのベッドに座る形になる。
極めて小ぶりな一物がプルンと揺れ、すぐに再び上を向く。
膝を突いて、一物を眼前に見るクーゼラ。
「こんだけキ〇タマ責め食らって、ビンビンなんてガスリョ凄い！」
「ぐ、ぐうう」
――いや、意味わかんねえ。
激痛の中でも、心の中で素で突っ込むほどクーゼラの話は意味不明だ。
縮み上がった肉玉に手を伸ばす。
ガスリョが手で押さえているが、金蹴りで力が入らないのであっさり外される。
「あ、あ……」
まだ何かするのか、と震えるが、力が入らず、身動き取れない。
チュポン。
わざと、口や舌で音を立てるクーゼラ。
「はうっ、ま、マジか……どういうこと……あっ！」

舌をゆっくりと回転させ、一物の周りを這わせる。

いつ皮が戻ってもおかしくない小ぶりな先端部と、皮の間を下の先で抉る。

――おほ、チンカスまみれよ。酷いわねこんなチ〇ポで女の所に来るなんて。こんな汚チ〇ポ咥えてるなんて……興奮するわ！

ドＳながら、パッとしないというかマイナスの相手と自分がしているのを想像して興奮するタイプである。

そんな彼女にとって、モノがあまり手入れされていないのは**ポイントが高い**。

普段ならちゃんと洗えと思うが、ここまでくるとその価値が逆転する。

ベロベロベロベロ、徐々に刺激に慣らしていくつもりだったが、我慢できず短小チ〇ポを口の中で犬のように舐めまくるクーゼラ。

歯を食いしばり、上半身だけ仰け反るガスリョ。

「はあああ！　や、やば……早い、早いって！」

チュポン、といい音を鳴らして口を離すクーゼラ。

「うふふ、十個近く年上よね、ガスリョ」

「ま、まあ……」

「そして、金蹴り食らって立ってるドエ……根性のあるおチ〇ポの持ち主。期待していいわよね？」

ドM、というのは流石に控えるクーゼラ。

「金蹴りって期待云々と関係あるか？」

「もう私、ヌレヌレよ。うふふ、おマ〇コこんなにしてたら、エッチな子だと誤解されるわね」

立ち上がり、ガスリョの横を通ってベッドの真ん中に行く。

「ね、こっち見て」

「ん……おおっ」

暗がりの中でも、ベッドに立ち上がったクーゼラの花園が湯気が立つほど熱を帯びているのがわかった。熱気と、雌蜜の甘酸っぱい匂いが漂ってくる。

「ガスリョのキ〇タマ責めてたらこんなになっちゃった……責任取ってよね？」

「わけわからんが……いただきます」

「あ……んっ！　オッパイだめえっ！　もう入れて、我慢できないっ！」

「ん……それじゃ……うほおおっ！　す、すげえ、マジでグチョ濡れだ……」

本当は夜這いを喜んでいたのか、と思うガスリョ。

それにしては金責めが強烈過ぎたが、都合よく忘れる。

クーゼラは八割ぐらい本気だったのでまだ肉玉は普通の男なら立たないぐらい痛い。

しかし、本人は知らないがＭ体質のガスリョの一物はギンギンで、鉄のような状態でクーゼラに侵入する。

両足を掴み、クーゼラの肩の上に押さえ込むような形。

深く一物を挿入できる、短小の味方の体位だ。

眉を顰め、呻くような声をあげるクーゼラ。

「あああっ！　いやっ、いやっ！　チンカスまみれの短小チ〇ポに犯されるなんて！　子供と並んでオシッコしたらこっちの方が子供のだと思われるような小さいおチ〇ポ入ってくるうう！」

「はふっ」

あまりのド直球の短小責めに、もう一回金的を食らったような気持ちになるガスリョ。

それでも、ドM根性を見せてパンと軽快に腰は振り続ける。

モノが小さいとはいえ、それに慣れきった熟練者は一物が抜けるかもなどという不安はまったくなさそうな感じで高速ピストンを続ける。

本来ならゆっくり慣らしていくが、あまりにもグチョ濡れなので一気に盛り上げてしまおうと思った。

やはり慣れている。

「そらそら、今度は横向きだぞ」

「ああああん！　いいわっ！　おチ〇ポ気持ちいい！　キ〇タマ蹴った相手のおチ〇ポいい！　握り潰しかけたタマタマつきのおチ〇ポ最高っ！　もっとおマ〇コジュボジュボしてっ！　去勢寸前だった短小チ〇ポ気持ちいいいっ！」

——なんか端々が怖ええなこいつ。っていうか、小さい小さい遠慮なく言いやがって……

しかし、気持ちいいのでピストンはやめない。

今度は、後背位に移行する。

「ああっ！　気持ちいい！　私っ、潰しかけたキ〇タマの持ち主に犯されてる！　包茎おチ〇ポ、短小チ〇ポにいかされるっ！　おごおっ！　おごおおおっ！　いいっ、いいっ！」

パッとしない男に犯されている自分に興奮するタイプのクーゼラ。

出来るだけそういう内面は隠すが、タガが外れてあらぬことをわめき散らす状態になると相手の男は結構鼻白む。

「何だよこいつは……でも、くそっ！　おマ〇コにはかなわなかったよ……この女、肌もつやつやで乳もケツも肉付きちょうどよすぎるし、その上名器だなんてかなうわけねえ……あ、はうっ」

ギュギュギュ、と鍛えた膣力を見せるクーゼラ。

そういう技も盗賊の技術の一つであるが、それ以上に締められた男の情けない顔が大好きなドＳであるから、熱心に鍛錬してきている。

後背位だが、振り返って微笑んでみせるクーゼラ。

「うふふ、褒めてくれてありがとう。あなたもセックスのテクかなりいいわ」

「そうだろ？」

短小を補おうと努力してきた結果だ。

「っていうか、スゲえ締まる……」

「おチ〇ポ粉砕可能よ」

「中出ししていい？」

「こらあ！　聞きなさいよ！　キュッキュ、と締めて、チンチ〇粉砕するわよ？　まあ嘘なんだけど！」

「おううっ、おう、まずい、まずいぞ」

「あ、先にいきそう？　それじゃ、私も集中して……ん、んん。あっ、あっ！　凄い、凄いピストン！」

「そらそら！」

ズコズコズコズコズコズコズコズコズコズコズコ、ほとんど無意味というか、喋る意味がないような台詞を吐きつつ腰を狂ったようにクーゼラのむっちりお尻に叩き付けまくるガスリョ。

いこうと集中しているクーゼラは、その激しい刺激に答えて背骨の線を撫でたい背を反らせる。

「ああっ！　いいっ！　いく、行きそうっ……もうだめ、もうだめっ！　イッちゃうから！　それまで我慢して！　我慢してよ！」

「わ、わかってる！　いけ、いけっ！」

熟練者らしく、必死で押さえるとなれば高速ピストン中でも押さえられる。

「あっあっあっあっ、やばい、やばいわっ……もう、ああっ！　もうだめっ！　いく

いっちゃうううううううううううううううううううっ！」

ベッドに上体を崩し、柔らかい尻を突き上げて伸びをするような猫の形で絶叫するクーゼラ。

それにあわせ、ガスリョも我慢をやめて腰を叩きつけて、いくと同時に尻に腰を思い切り押し付ける。

「うおおおっ」

呻きは一瞬。

ドクンドクンとここ数年記憶にないほど大量に粘液を放出するガスリョ。

――ああ、ヤベエ。こんなに出したら、しばらく立たないかも……

だが止まらない。

肉玉が強烈な快感でギュンギュンに締め上げられ、クーゼラがもう一人現れてまた握り潰しにきたのかと思うほどだった。絞りきるように、粘液が噴出していく。

「いやああっ！　出てる、中に出てるっ！　キ〇タマ蹴られてビンビンのドMチ〇ポの変態キ〇タマ汁おマ〇コの中にでてるっ！」

粘液が出ないようにしたいかのように強烈に締め付けるクーゼラの背中にしがみつき、乳房を揉み潰すガスリョ。

「おおおっ！　で、でる……玉空っぽになるっ」

出終わっても、しばらくぐったりして動けないガスリョと、余韻を楽しみ、シーツにしがみついたままのクーゼラ。

月明かりに、結合したままの男女が照らされていた。

体験版終わり

この後仕事先の村に行き、村の女たちだけに護身術を教えるクーゼラ
彼女の性癖から当然、キ〇タマ責めオンリーの内容
そしてそれを偶然覗いてしまうガスリョ
見つかり、ドM調教となります　金責め・ＣＦＮＭ展開

続きは製品版で